

村木正武先生ご退任にあたって

小林 栄智

いつも微笑を浮かべ、実際の年齢よりは大変に若いと誰の目にも映ってきた、あの村木正武先生が1988年3月31日をもって本学を定年退職される、感慨無量であります。

たぐい稀な村木先生の経歴は特に注目に値すると思います。この豊かな体験が本学における先生の教育・研究に寄与するところ大であったと感じます。慶応義塾大学文学部では哲学科に籍をおき、ショーペンハウアー、ニーチェ、三木清などに熱中されたという。学部卒業後は中学校、高等学校において、合わせて15年間にわたり英語を教えられた。英語を教えるかたわら、パートランド・ラッセルなど論理実証主義の哲学者に興味をいただき、その分野の読書を専ら続けられた。かくして言語の構造と言語の意味の研究が重要であることに気がついた、と先生は述懐されている。

村木先生と本学との関わりは、1959-1960に「国際基督教大学・教育研究所・特別研究生」として小島軍造先生の下で“Philosophical Foundation of Democratic Education”の研究に参加された時にはじまる。つづいて本学大学院教育学研究科修士課程（英語教育）を修了。さらに Fulbright Teacher Exchange Program の奨学生として San Francisco State University に留学されました。1963年4月から語学科の専任助手（英語担当）として本学での勤務がはじまります。専任講師在職中に Fulbright scholar として1967-1970に University of Texas において言語学の分野で博士号の学位を取得されたことは周知の通りです。このように村木先生は1969-

1970年の歴史的な学園紛争の最中にも悠々自適にテキサスの地で大学院博士課程の研究のできる幸運に恵まれました。本学に帰任後、助教授、準教授、教授として、教育に研究に、また各種委員会、大学院英語教育主任、教育研究所所長に、従事され今日にいたりました。

1965年度から語学科のカリキュラムが大巾に改編され、“Five Departments”が置かれることになり、その一つとして「言語学科」ができました。やがて村木先生は学部で言語学分野の講義を担当されるようになり、ついで大学院教育学研究科英語教育の言語学関係の講義を分担されるようになりました。この間数多くの卒業論文、修士論文の指導に当って、村木先生の学問的な緻密さ、粘り強さ、忍耐力には定評がありました。

先生の言語に対するひたむきな探求心の表われたエピソードは枚挙にいとまがありません。時々こんなことがありました。研究室で昼食などを共にして話がいろいろなことに移っていく。この間村木先生は常にあることを考え続けているのでしょうか。進行している話題とは全く関係のない「この文はどうだろうか？」と突然の発言。「この文」は英語であったり、日本語の場合もある。居合わせたものは一瞬反応に窮する。またこんなことも思い出します。本学に就任して間もないアメリカ人講師が私に「村木先生は少し変わっていませんか、明々白々な英文について根掘り葉掘り問い正すのです。それも一度ならず再三にわたってなんですから。」と言った。この講師は英語担当ではない。村木先生の質問の意図を説明してやったことは言うまでもない。先生の常日頃の言葉に「言語研究の目標は言語であり、いかなる言語理論も言語に接近する手段である。」がある。ともすると言語理論そのものがすべてであり、その理論を如何に構築するかが言語学の研究目標であるかの感のある時勢にあって、先生のこの言葉は言語学、特に理論言語学、を研究するものにとっての警鐘とすべきであろう。

先生はまた語学科主催の「ICU 夏季言語学研究会」にとって不可欠の存在でありました。同研究会発足間もない時期から、ほとんど毎年、会の大黒柱として活躍され多大な貢献をされました。同研究会は語学科の内部事情にも

起因しますが、その「任務完了」ということで1986年度をもって幕を閉じることになり、先生も複雑なお気持ちかと思えます。

村木先生の専門領域はGenerative Semantics（生成意味論）、Montague Grammar（モンタギュー文法）、そしてGeneralized Phrase Structure Grammar（一般句構造文法）である。先生の燦然と輝く学術研究、学会活動についてはここに添附された資料が、そのすべてを如実に物語っています。

本学には「大学院教授」というものがあります。この制度により現在も幾人かの方々が講義・研究・指導に従事されている。言うまでもなく村木先生はこの制度によって本学のために、もうしばらく後進の指導をおねがいできる最適任者の一人一人であります。それにも拘らず、昨今の学内事情からとはいえ、先生に大学院教授として本学に留まっただけでないことは断腸の思いであります。「国際性」、「キリスト教主義」、「学問の府」を標榜してきた本学には避けて通れないさまざまな煩わしい問題、特に対人関係にかかわる問題が存在し続けているように思われる。このような環境にあって、村木先生は四半世紀にもならんとする長い年月、本学のために尽力くださり、本当にご苦労さまでした。先生の本学における貴重な知的活動を継承し、それをさらに発展させるべく努力することが後に残されたものの課題であると痛感します。

村木先生には、これからますます健康に留意され、雑事を離れ、より快い人間関係に恵まれ、新しい学園で言語学の教育・研究に邁進されますようお祈り申し上げて措別のことばといたします。

（1987年10月）

村木正武教授研究業績・学会活動

1965, "Negation in English and Japanese", *Descriptive and Applied Linguistics*, ICU, 3 : 80-94.

- 1965, "A study of syntax without transformation rules", *Descriptive and Applied Linguistics*, ICU, 3 : 95-109.
- 1967, "Some problems of translation and generative grammar", *Descriptive and Applied Linguistics*, ICU, 4 : 69-92.
- 1970, *Presupposition, pseudoclefting, and thematization*, Ph.D. dissertation, University of Texas, Austin.
- 1970, "Presupposition and pseudoclefting", *Papers from the Sixth Regional Meeting*, Chicago : Chicago Linguistic Society, University of Chicago, pp. 390-399.
- 1970, "The crossover constraint on logical predicates", *Papers in Linguistics*, Kuroshio Shuppan, 3 : 11-32.
- 1970, "A sound change in a Tohoku dialect", *Papers in Linguistics*, 3 : 341-348.
- 1970, "Does Japanese violate Ross' metarules of gapping", *Papers in Linguistics*, 3 : 419-430.
- 1972, "Intransitive analysis of root modals", *Studies in English Literature* : English number 1972, The English Literary Society of Japan (日本英文学会), pp. 109-127.
- 1972, "Review: Robert T. Harms, 1968, *Introduction to Phonological Theory*, Englewood Cliffs, N.J. : Prentice-Hall", *Foundations of Language*, 9 : 254-261.
- 1972, "Logical implication of implicative verbs", 『言語研究』 (Journal of the Linguistic Society of Japan), 日本言語学会, 60 : 17-24.
- 1972, 「書評 : 安井稔編, 1971, 『新言語学辞典』, 東京 : 研究社」, 『英文学研究』, 日本英文学会, 49 : 1 : 135-140.
- 1972, "Lexical insertion of implicative verbs", *Descriptive and Applied Linguistics*, ICU, 5 : 220-237.
- 1972, 「変形文法と英語教育 (Transformational grammar and English

- teaching)], 『新潟県高等学校教育研究会英語部会誌』, 16 : 2 - 19.
- 1972, "Lexical insertion and presupposition", 『エネルギー (Energeia)』, エネルギー発行会, 4 : 58 - 65.
- 1972, "Discourse presupposition", *Papers in Linguistics*, 5 : 300 - 320.
- 1972, "Presupposition and implication (第66回大会研究発表要旨)", 『言語研究』, 日本言語学会, 62 : 98 - 100.
- 1973, "Passivization and the cross-over constraint in Japanese", *Descriptive and Applied Linguistics*, ICU, 6 : 113 - 123.
- 1973, 「書評 : Minoru Nakau, 1973, *Sentential Complementation in Japanese*, Tokyo: Kaitakusha」, 『英語教育』22 : 3 : 99 - 100.
- 1974, "Review : James D. McCawley, 1973, *Grammar and Meaning : papers on syntactic and semantic topics*, Tokyo : Taishukan-shoten", 『英語学』, 12 : 100 - 122.
- 1974, *Pesupposition and Thematization*, Tokyo: Kaitakusha, pp.viii + 138.
- 1974, "Presupposition in cyclic lexical insertion", *Foundations of Language*, 11 : 2 : 187 - 214.
- 1974, (共著者 : 奥津敬一郎), 「英語の敬語」, 『敬語講座第8巻 : 世界の敬語』, 明洪書院, pp. 163 - 190.
- 1974, "Rule features and marking conventions", *Descriptive and Applied Linguistics*, ICU, 7 : 173 - 195.
- 1975, "Global and phonemic feature constraints", *Descriptive and Applied Linguistics*, ICU, 8 : 139 - 162.
- 1975, 「書評 : Akira Ota, ed., 1975, *Studies in English Linguistics*, vol. 3, Tokyo : Asahi Press, 『英語展望 (ELEC Bulletin)』, 51 : 47.
- 1977, "Review: John Hinds, 1976, *Aspects of Japanese Discourse Structure*, Tokyo : Kaitakusha", 『英語学』, 16 : 116 - 129.

- 1977, "Certain ambiguities and relative clause structure", ICU, *Descriptive and Applied Linguistics*, 10 : 189 - 202.
- 1977, "Comments on Nishiyama's 'Notes against case grammar'", Inoue, Kazuko, ed., 1977, 『昭和51年度科学研究費研究報告：日本語文法の機能的分析と日本語教育への応用』, ICU, pp. 195 - 203.
- 1977, 「意味構造と前提」("Semantic structure and presupposition"), 文部省特定研究言語総括班編, 『講演論文集』, pp. 10 - 19.
- 1978, "Review : Masaaki Yamanashi, 1977, *Generative Semantic Studies of the Conceptual Nature of Predicates in English*, Tokyo : Kaitakusha", 『英語学』, 19 : 95 - 111.
- 1978, (共著者：斎藤興雄) 『現代の英文法2：意味論』, 東京：研究社, pp. xiv + 442.
- 1978, "Sentential pronominalization and precyclic lexical insertion", *Annual Reports*, ICU, 3 : 127 - 130.
- 1978, "*Sika-nai* construction and predicate raising", John Hinds and Irwin Howard, eds., 1978, *Problems in Japanese Syntax and Semantics*, Tokyo : Kaitakusha, pp. 155 - 177.
- 1978, "Lexical presupposition of *bachelor*", Inoue, Kazuko, 1978, ed., 『昭和52年度科学研究費研究報告：日本語の基本構造に関する理論的実証的研究』, ICU, pp. 145 - 147.
- 1979, "On the rule Scrambling in Japanese", George Bedell, Eichi Kobayashi, and Masatake Muraki, eds., *Explorations in Linguistics : papers in honor of Kazuko Inoue*, Tokyo : Kenkyusha, pp. 369 - 377.
- 1979, "Relativization and *make headway*", *Annual Reports*, ICU, 1985 / 3, "Categorial analysis of passivization and reflexivization of Japanese", Inoue, Kazuko, 1985, ed., 『明確で論理的な日本語の表現（昭和54年度文部省科学研究費補助金特定研究最終報告）』,

- ICU, pp. 113 - 138.
- 1986, 「チョムスキーとモンタギュー文法」, 『チョムスキー小事典』, 大修館書店.
- 1986, “Syntactic categories in Japanese”, *Educational Studies*, 『教育研究』, ICU, 28 : 187 - 204. (Revised version of Muraki, 1984, “Syntactic categories in Japanese”).
- 1986, “Some problems of *tearu* sentences in Japanese”, *Educational Studies*, 『教育研究』, ICU, 28 : 221 - 236.
- 1986, 「書評, 山梨正明著, 『新英文法選書 12, 発話行為』, 大修館書店, 1986/7」, 『英語青年』, 132 : 9. 41 - 42 (132 : 457 - 458).
- 1986, “Categorial analysis of passivization and reflexivization of Japanese”, Soga, Matsuo, ed., 1986, *Proceedings of the Nitobe Ohira Memorial Conference on Japanese Studies, Panel 4 : Papers in Japanese linguistics*, University of British Columbia, Vancouver, B.C., Canada, 97 - 123.
- 1987, “On comparative *yoru*”, *Educational Studies*, 『教育研究』, ICU, 29 : 235 - 244.
- 1987, 「たい, がる, たがる, られる (GPSG的分析)」, 『日本語の特性と機械翻訳』, 第一回「大学と科学」公開シンポジウム予稿集, pp. 11 - 22.
- 1987, “*Tai, garu, tagaru, rareru* (GPSGteki bunseki)”, 第1回「大学と科学」公開シンポジウム組織委員会編, 『日本語の特性と機械翻訳』, (株)出版科学総合研究所, pp. 31 - 40.
- 1987, “Conjunction *ga* and contrastive *wa*”, ms.
- 1988, “*Tai* and *Garu*, Syntax vs. Morphology”, To appear in the *Journal of Japanese Linguistics*.

学会及び研究団体における委員，役員：

1975-79, 編集委員, 『英文学研究』, 日本英文学会

1978, Research Project Reviewer, Linguistics Program, National Science Foundation, U.S.A.

1983-1985, 事務局長, 日本言語学会.

1983-1987, 編集委員, *English Linguistics*, 日本英語学会.

1983, 評議員, 日本英語学会.

1984, 所長, 教育研究所, ICU.

1983, 幹事, 日本論理文法研究会 (会長: 石本 新).

1985, 委員, 日本言語学会.

1983, 日米教育委員会 選考委員 (Fulbright Research Scholar Screening).

1985, 客員研究員, 言語文化研究所, 津田塾大学.

1986.7.1-1988.2.15, 文部省 学術審議会 専門委員 (学術用語分科会).